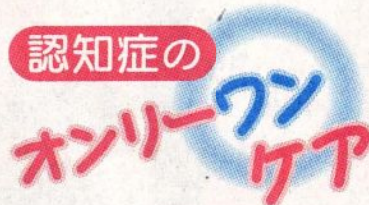
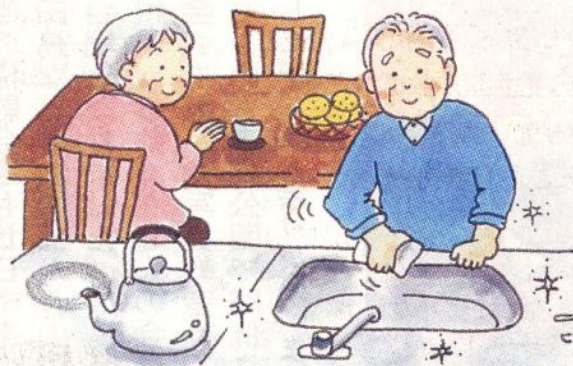


康

くらし



安原耕一郎 ①



イラスト・中本ちずる

妻が認知症の高齢者夫婦の場合、物忘れによる夫揚げんかは多くなるようだ。「鍵がない」「財布がない」などげんかの原因には事欠かない。しかし、長年連れ添った夫婦の絆は残っているため、日常生活は助け合って不思議とうまくいく。

こんなケースがある。妻が認知症の80代の夫婦。買い物や食事の支度は、妻と近くに住む嫁、ヘルパーが協力して行い、夫は町内のこと、風呂や薬の管理などをしている。

妻は、お金や新聞、料理の材料などの置き忘れがひどいが、部屋は片付いている。夫がコツコツと後始末をしているからだ。夫は、冷蔵庫に同じものがあっても、同じことを繰り返す言われても、「何も言わず見守る」という支援のポイントを熟知し、実践している。一方、妻は、誰からも干渉されない場所を、家の中に確保している。その「隠れ家」は長年主婦として親しんできた台所。そこで過ごす時間はストレスから解放される。

アルツハイマー型認知症は進行の状態にかかわらず、ヘルパーやデイサービスなどの利用に加えて家族の支援があれば、在宅ケアが可能だ。そのためには家族の介護疲れの軽減

夫婦の絆

日常生活は助け合いで

はもちろん、家族の病気の管理も必要だ。

今回のケースでは、夫は軽い脳梗塞と高血圧の持病がある。血圧などの管理を行い、再発予防に全力を傾けることが最重要だ。そのことは近くに住む嫁に伝えてある。親の暮らしぶりに変化があれば、介護スタッフに知らせることも大事だ。

施設側はとかく、デイサービスの利用時に問題がなければ、家での生活は順風と考えがちだ。「電話の回数が増えた」「汚れ物が増えた」「買い物に行かなくなった」など、家庭での情報は意外と不足している。高齢夫婦の生活状況を知ると、ケアマネジメントの手助けになり、新たなケアを試みることができらるだろう。

「いくらけんかしても夫婦の絆は強い」。これも家族の言葉である。絆が壊れると「虐待」が生じることがあるので、かかりつけ医かケアマネジャーに相談してほしい。

(日本認知症グループフォーラム協会理事 福山市)